

平成30年度福島県地域創生・人口減少対策有識者会議
第1回会議及び現地視察結果概要



I 第1回有識者会議

実施日：平成30年9月3日（月） 9：00～10：00

場 所：同日実施の現地調査のバス内

1 会議

- 別添次第（別添1）に基づき事務局より説明。
- （座長より）本県の定住・二地域居住の状況について、提供できる資料があれば頂きたい。
→第2回有識者会議に資料を提供したい。（別添2）

2 西内委員より報告（地方創生が目指す社会）

- 私も移住者。自然環境は親のチカラで子供に提供することはできない。人的環境も一朝一夕ではできない。自然環境が子供に与える影響を考慮し、定住を決めた。
- 福島市内の5大学と福島市、商工会議所、中小企業事業団と連携して、「福島市産官学連携プラットフォーム」を形成し、福島市が抱えている課題について大学として何ができるか検討してきた。
- ACF（アカデミアコンソーシアム福島）が県レベルで行ってきた、点と点をつなぐ

線のような活動が、福島市内では面の活動として展開できることに気づいた。

- 重点目標は、若者が地域でやりがいのある仕事に出会い、ここで暮らし、働き、次の世代を生み育てていきたいと思えるようになること。
- 若い女性は、将来、自分が管理職になることにメリットを感じられず、申し出を断ってしまうケースがある。管理職になることで、自分のやりたい仕事が見つけれられる、自己実現できることを若者にしっかり伝える必要がある。
- 地元の企業は大卒の若者を採用することに対しハードルがあることがわかった。地元で自分の家から通って働きたい、自己実現したいという学生はいるので、さらに地元の企業で働く若者を育てていきたい。
- 福島市から強く依頼されたのが待機児童対策。本学を含め養成校が3校あるので、教員と民間の保育所や学童保育所の経営者方と検討し、様々な戦略を立てた。市長の強いリーダーシップもあり、待機児童数は昨年の260名から今年4月には130名に半減した。来年度には0にしたい。
- まちなかの賑わいについて、福島市から若者の目線で提案して欲しいとの要請を受け、10月に市長と若者で意見交換を行う。
- 今までやってきたことを足場にし、福島市を拠点として全県的にこの動きを展開していきたい。
- (座長より) 具体的取組に展開されていることは素晴らしい。関東圏に近いことから女性の県外流出が多い。これは、人口減少に大きな影響を与えることから、県内の女性が自分の価値観を守り育てることができる環境をつくることが重要。これからも注目させて頂く。

II 現地視察

実施日：平成30年9月3日(月) 11:50~16:30

場 所：三島町 つるの IORI カフェ

昭和村 旧喰丸小学校

会津美里町 新鶴ふれあい公園

参加者：福島県地域創生・人口減少対策有識者会議委員 8名

(岡崎座長、赤松委員、石山委員、金内委員、日下委員、須貝委員、高橋委員、西内委員)

1 三島町 つるの IORI カフェ

(1) 三島町地域政策課より地方創生の取組説明

- 三島町の特産品として会津桐、編み組み細工などがある。
- 戦略の基本テーマは、「雪国の生活文化を生かし魅力ある三島を創る～交流人口の拡大から定住人口へ～」で、「若者を増やし持続可能な社会をつくる」を目指すべき方

向性としている。合計特殊出生率を 1.45 から 1.8 に引き上げ、人口規模 600 人維持を目標としている。最終目標は高齢化率を引き下げ、老年人口 2 人を生産年齢人口 3 人で支える社会の実現を目指す。

- 定住のための雇用の場の創出の取組として、生活工芸村の推進がある。生活工芸アカデミーとして、町の特産品の編み組み細工を中心とした生活工芸技術の習得や、農業や林業、地域の文化や風習を学び、農山村で自活できる素養を身につける一年間のカリキュラムを昨年度から開講している。
- 平成 29 年度は首都圏を中心に 4 名の女性が受講し、そのうち 2 名が引き続き居住して生活工芸伝承生として生活工芸村の推進に取り組んでいる。平成 30 年度は女性 4 名、男性 1 名が受講している。



(2) 移住・定住への取組及び移住者との面談

- 佐久間源一郎氏（一般社団法人 IORI 倶楽部代表理事）から、移住・定住に向けた取り組みや今後の展望について話を伺い、その後、三島町への移住者、高枝住男氏（(株) toor 代表取締役）及び桜沢鈴氏（漫画家）から、移住のきっかけや移住後の生活について話を伺った。

(3) 質疑

- 生活工芸アカデミー受講生の募集方法はどのようなものか。
→ 1 期生は町の HP や田舎暮らしの本で募集し 6～7 名の応募があった。2 期生は 1

期生の方が自主的に体験をブログにアップしたのを見たという方が多かった。町の情報より、体験者の生の情報の方が発信力はある。(三島町舟木氏)

2 昭和村 旧喰丸小学校

(1) 昭和村産業建設課より地方創生の取組説明

- 平成27年度にまち・ひと・しごと総合戦略を策定し、4つの基本目標を定めた。1つ目として、地域の特性に合った雇用創出として、宿根カスミソウを始めとした新規就農者の確保を目指している。2つ目は新しい人の流れをつくるとして、この喰丸小学校のように、廃校を活用した観光交流拠点を整備して事業を進めている。3つ目は子供を生み育てる環境を整える。4つ目は伝統を守って昭和村らしい輝きを磨くということで、からむし織りを継承する取組を推進している。



(2) 昭和村産業建設課より廃校を活用した観光交流拠点の整備について

- 校舎は昭和12年に建設され、最盛期(昭和35年)には118人の児童が在学していたが、少子化が進み昭和55年3月に廃校となった。その後、幾度となく取り壊しの話が出たが、平成25年に校舎を舞台とした映画の公開を契機として保存・活用の気運が高まり、保存が決定した。平成29年6月に改修工事を着工して平成30年3月に完成した。
- 施設は、大銀杏と校舎を眺める観光スポット、学び・暮らし・交流・産業の4つの領域で様々な主体が活動する拠点として4月にオープンした。年間目標入館者数8千人

で、8月末まで約5,100人が訪問している。

- 施設内には、観光交流係と観光協会が常駐し、観光情報発信のほか、移住・定住の相談なども受け付けている。

(3) 昭和村産業建設課よりカスミソウの後継者育成事業について

- 昭和村は夏秋期のカスミソウ出荷量が全国一。昭和58年より、葉たばこ栽培からカスミソウ栽培へ転換してきた。
- 人口減少の影響で、カスミソウ栽培農家も減少しており、歯止めをかけるために平成15年に協議会を立ち上げ、カスミソウの新規就農の支援を行ってきた。
- 一年間昭和村に住みながらカスミソウ農家の指導の下で勉強し、翌年には新規就農できるよう支援。これまで、年平均1人程度就農してきた。
- 平成29年度の売り上げは4億円。1シーズンに2千万円を売り上げる農家もいる。カスミソウだけで食べていける産業となっている。
- 平成29年度に、人口減少が一層加速する中、新たな新規就農者確保の取組が必要なのではないかということで考えられたのが、「かすみの学校」という研修制度。
- 今までは、1年間の研修期間は無収入であったが、「かすみの学校」はインターンシップ制度で、3泊4日とか、1泊2日などの短期研修制度を設け、村に来てもらうハードルを下げた。季節毎に来てもらって研修を行いつつ昭和村を知ってもらい、1年間の研修にステップアップしていくことを目的としている。
- 平成29年度の実績は延べ11組17人。翌年に新規就農者した者が1組、1年間の研修に移行した者が2組。村内のカスミソウ農家に就職したのが1組で予想以上の成果であった。
- 平成30年度は2組参加、今月に3組の応募があった。昨年と比べて少ない傾向にあるが、初年度はメディアに大きく取り上げられた結果であり、今後はもっとPRしたい。



(4) 昭和村からむし推進室より織姫・彦星事業について

- 昭和村は古くから、からむしの生産地として生産技術を伝承してきた。特に、新潟県の国重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」の原料として供給している。平成3年には「からむし生産」と「苧引き」が国選定保存技術に選定され、平成23年には「会津のからむし生産用具及び製品」が国の重要有形民俗文化財に指定されている。
- その文化を継承するために、平成6年から「からむし織体験生（織姫・彦星）制度」を実施しており、5月から翌年3月までの約11ヶ月間、からむしの栽培から織りまでの体験を通して山村生活を学ぶ事業となっている。
- 今年25年目を迎え、これまで107名の方が体験をし、そのうち30名が村内に定住している。また、12名が地元の方と結婚しており、からむしの後継者育成事業として始めたものだが、結果として定住対策としても位置づけている。
- 今年の体験生は4名で、2名は福島県内、東京から2名来ている。
- 織姫事業を始める前までは、村の若者はからむしに興味を持とうとしなかったが、このような文化があることを全国に情報発信すると、そこに光を感じて若い女性が沢山来るということを証明した事業。
- 履歴書を見ると一流企業のOL、公務員、キャビンアテンダントなど、経済的に何不自由ない生活をされている方々が来ている。このような方々が定住することにした理由は村の高齢者が生活の達人で、その知恵や技に惹かれて残りたいというものであった。
- 村の人もからむしを通して村の価値を認識し、自分たちの暮らしを見つめるきっかけとなった事業。



(5) 質疑

- 新規就農者の年齢層は
→ 昨年は50代だったが、一昨年は30代が2名、今年は40代が2名、法人で20代の若者が頑張っており、近年は若い世代が就農している。
- 村にはからむし織りを教えられるのは何名程度いるか。
→ からむし生産者は30名程度いるが、高齢化が進んでおり支える人が必要となって

いる。

- 伝統工芸は、現代の生活に如何にマッチさせるかが難しい。からむし織りのデザイン開発やマーケティングは村として考えているか。

→村で奥会津昭和村振興公社を立ち上げ、からむし製品の開発・販売を含めて公社で行っている。からむし織りは着物では数百万円もするものなので、財布や帽子など生活に密着した製品を開発しているが、なかなか経済的には難しい。ただ、昭和村のからむし織りは、平成29年9月に経済産業省の伝統的工芸品の指定を受けたので、これを起爆剤にさらに頑張りたい。

- カスミソウの市場性について、もっと品質を上げると市場が伸びていくものなのか。

→冬の間は南の方のカスミソウ生産団地で生産しており、年間では南の方の生産量が多いが、夏秋期では昭和村が日本一の生産量。関東圏の6割～7割は昭和村のカスミソウである。カスミソウは冠婚葬祭で使われるようになり需要はある。元々にはおいが独特で敬遠されてきたが、それを抑える葉の開発などもあって、結婚式のブーケなどにも使われるようになった。オファーは多いので、それに応えるべく新規就農者を増やし、生産量を上げることを考えている。

今後、福島県のカスミソウを海外へ出荷する動きもあると聞いている。

→昭和村のカスミソウは品質がよいと評価されている。

- カスミソウの栽培は難しいのか、研修を受けてやる気があれば独立できるものなのか。

→素人の方が来ても、指導農家の元で1年間研修を受ければ、十分できるし、村や県や農協もサポートする。

→県栽培普及員のサポートを是非お願いしたい。



3 会津美里町 新鶴ふれあいの森公園

(1) 合同会社社会津コシエル 業務執行役員 小林氏より観光型ワイナリー事業について

- うつくしま未来博の施設を町が譲り受け、リニューアルし活用。平成31年4月オープンに向け、レストラン・ショップ観光型ワイナリー施設に改修している。





4 岡崎座長による総括

現場を見て実際に取り組んでいる方の話を聞くことができ、有意義な視察であった。引き続き地方創生へ取り組む団体への支援を期待する。